

Title	アルキビアデス1篇におけるソクラテスの産婆術と教育： 自分に誠実に向き合うための対話と自己吟味
Sub Title	Socratic midwifery in the Alkibiades 1
Author	東, 敏徳(Azuma, Toshinori)
Publisher	三田哲學會
Publication year	2009
Jtitle	哲學 No.122 (2009. 3) ,p.121- 140
JaLC DOI	
Abstract	<p>The Alkibiades 1 is a rich but vastly underappreciated dialogue in educational studies. It offers a positive exemple of Socratic educational method and it then substantiates the effectiveness of Socratic midwifery (maieutic) strategy for the education. For this reason, this dialogue warrants close attention. Socrates utilizes a Alkibiades' unabashed desire for domination as a catalyst in his maieutic approach.</p> <p>In this article, I will show that Socratic conversation with the young Alkibiades transforms Alkibiades' self-awareness convincing him that he must take more trouble over himself if he desires to advise the Athenian citizen about its political affaires. Also I will focus on Socratic approach that the conversation will be to elaborate the Socratic educational aim of taking trouble over oneself.</p> <p>In the first part of this article, I will concentrate on the maieutic process in Alkibiades 1. Here we reach the core of the dialogue that 'taking trouble over oneself' is said to yield selfknowledge, which implies soundmindedness (sophrosune). In the second part, I will suggest some problem in this dialogue which is pararell to the Meno. In the third part, I will conclude that the educational essence in the Alkibiades 1 is to encorage people to dicipline oneself and to control oneself by self-criticism.</p>
Notes	投稿論文
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000122-0121

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

— 投 稿 論 文 —

アルキビアデス 1 篇における ソクラテスの産婆術と教育

— 自分に誠実に向き合うための対話と自己吟味 —

— 東 敏 徳*

Socratic Midwifery in the *Alkibiades 1*

Toshinori Azuma

The *Alkibiades 1* is a rich but vastly underappreciated dialogue in educational studies. It offers a positive example of Socratic educational method and it then substantiates the effectiveness of Socratic midwifery (maieutic) strategy for the education. For this reason, this dialogue warrants close attention. Socrates utilizes a Alkibiades' unabashed desire for domination as a catalyst in his maieutic approach.

In this article, I will show that Socratic conversation with the young Alkibiades transforms Alkibiades' self-awareness convincing him that he must take more trouble over himself if he desires to advise the Athenian citizen about its political affairs. Also I will focus on Socratic approach that the conversation will be to elaborate the Socratic educational aim of taking trouble over oneself.

In the first part of this article, I will concentrate on the maieutic process in *Alkibiades 1*. Here we reach the core of the dialogue that 'taking trouble over oneself' is said to yield self-knowledge, which implies soundmindedness (sophrosune). In the second part, I will suggest some problem in this dialogue which is parallel to the *Meno*. In the third part, I will conclude

* 聖徳大学幼児教育専門学校, 慶応義塾大学文学部 (非)

that the educational essence in the *Alkibiades I* is to encourage people to discipline oneself and to control oneself by self-criticism.

1. 問題の設定

アルキビアデス 1 篇はソクラテスを中心とする対話篇の中でも特別な位置づけができる。それは、アルキビアデス 1 篇にはソクラテスの積極的な教育実践が見られ、産婆術的方法を端的に示しているという点である¹⁾。

言うまでもなく、プラトンはソクラテスを代表人物として他の登場人物と対話する場面を記述した多くの著作を残したが、プラトンの初期の作品には特にソクラテスの基本的姿勢が残るとされている。アルキビアデス 1 篇同様、プラトンの初期作品群としてはカルメニデス篇やゴルギアス篇なども認められている。しかし、これらにおいては、ソクラテスの対話相手はソクラテスとの対話を通じて自説を変更するという事はない。むしろ自分の立つ立場をソクラテスにより反駁された後も、頑なに固執していくようになる。この点でカルメニデス篇やゴルギアス篇などはソクラテスの対話相手への論駁が中心となっている。これに対し、アルキビアデス 1 篇ではソクラテスの積極的な教育方法が見られ、産婆術的教育方法がアテナイの若者に向かって行われているのを見る好作品である。まず、アルキビアデス 1 篇はこの点で教育学的に注目に値する。

さらに、アルキビアデス 1 篇は初期対話篇の中でもリュシス篇、エウテュディモス篇のような比較的論駁的側面の少ない作品とも異なり、多数の人との会合の中で対話が行われているものではない。ここでは、アルキビアデスとの対話は一対一のプライベートな雰囲気の中で他者の目を気にしない率直な様子を示している。

この一対一の関係の中で、ソクラテスはアルキビアデスが持つ政治的野望を糸口としてより大きな自己認識へと導いていこうとする。アルキビア

デスは才能にも社会的地位にも恵まれている。そしてソクラテスの問いかけに対し率直な態度を持って答えていく。徐々にアルキビアデスは自説を変えていき、ソクラテスとの対話の中で自己改革を成し遂げていく。最後には、アルキビアデスはソクラテスに向かって、師とするという宣言をしている(135d)。この点でアルキビアデス 1 篇は、教育的側面からソクラテスの対話という活動を考えていくなら、重要な作品であると本論は見る。

本論の目的は、従来ソクラテス的方法として初期作品群の中で特徴とされてきたエレンコス(ἐλεγχος, 論破)としてソクラテスの対話を捉える見方よりも、ソクラテスの対話を自己認識へと導くマイエウティコス(μαιευτικός, 産婆術)の営みとして解釈する見解を示すことである。ソクラテスはアルキビアデス自身の自惚れを対話の中で気付かせるような問いを通じて(124b-d)自分自身に気を付けることと自分の付帯物を配慮することの違いを提示する(128a-129a)。この中でソクラテスは他者に自分を映すことで「自分自身に気を付ける」という自己認識を磨いていく過程が重要であると指摘する。本稿では、対話を通じて自己知識に至る過程としてソクラテスの教育方法、産婆術を位置づける。すなわちアルキビアデス自身の内在的成長が自己吟味への手ほどきにより促進され、産婆術という外在的な働きかけが内在的な自己成長を促進するという教育的側面がソクラテスの対話の中に見出されるという主張を展開する。(村井実の研究としてソクラテスの産婆術では助産と論破という二つの過程があるが、論破のみが注目されているという指摘がある²⁾。)

この目的のため、本稿ではアルキビアデス 1 篇を含む初期作品群の特徴がソクラテスのエレンコス、論駁にあるという従来の見解、ブラストス³⁾、リープ⁴⁾、ブリックハウス・スミス⁵⁾の見解と異なり、産婆術という教育方法としてソクラテスの対話を位置づける。その位置づけとは「自己自身に気を付ける」という自己吟味が教育的見地から見た場合、アルキビ

アデス 1 篇の重要なテーマであり、政治的成功や社会的栄達を重視していたアルキビアデスを論駁することはその準備段階として位置づけるべきであるという立場である。

このためアルキビアデス 1 篇の構成を「自分自身に気を付ける」という点を中心として見直す。続いて、ソクラテスの実践の含む特徴——それは循環論法として指摘されている例もここで示す⁶⁾——を見る。最後に、その特徴はソクラテスの産婆術の前提となる自己吟味を促す教育的意義を有することを示す。

2. アルキビアデス 1 篇に見られる産婆術の構造

ソクラテスの対話の相手となるアルキビアデスは、古代アテナイの黄金時代を築いたペリクレスの甥に当たる。ソクラテスとの対話の時にはちょうど成人になる頃に当たる。すなわち政治的生活に入り、将来を嘱望されている若者である⁷⁾。それだけに政治的野心を強く持ち、また自分を是とする自負心も大きい。同時に当時のアテナイ市民にとっても端麗な彼の風貌と活発な彼の才能は注目に値されていた。アルキビアデスは当時のアテナイ社会では名門の出身で才知に優れ、美貌の持ち主であったとされる。

アルキビアデス 1 篇はソクラテスがアルキビアデスの意図を確かめるところから始める。まずアルキビアデスの大志が広大であることを認め、その大志を実際に達成していくためには哲学者の助けが必要であることを指摘する (105e)。その助けとは政治的な活動に先立ち、「自分自身に気を付けること (*ἑμῶν αὐτῶν ἐπιμεληθεῖμεν*)」(128d) を強調するところで示される。この自分自身に気を付けるという自己吟味への手ほどきはこの対話篇の中を一貫して流れている主題である。

ソクラテスはアルキビアデスに対して言う。まず政治は正不正に対して偏ってはならず、公正でなくてはならない、という共通の出発点を確認する。しかし、アルキビアデスが未だ十分にはこの点を自覚していないこと

を示すため、ソクラテスは問う。「君が正不正について知っているというのは…あやしいことになるのではないか」(112e)。自負の強いアルキピアデスは直ちにソクラテスに答える。

アルキピアデスは最初「優れた善い人とは…国家の一員として国政に参加し、支配する」(125d)ものと考えていた。これに対して、ソクラテスは国政に出て何に参加し、支配するのかと問う。国政が公共建築や公共衛生について議論するならば、その専門家から得られる知識がその役に立つ。しかしそれなら、その専門家でないアルキピアデスが果たす役がなくなる。さらに国家間紛争についても外交の専門家の方が相応しい立場にあり、その際にも出番がなくなると反駁する。

ソクラテスはこれに加えて、さらに二つのアルキピアデスが従うべき吟味を提示する。一つは国家という船(125e-126b)の喩えであらわされ、もう一つはコーラスリーダーの喩えである。ソクラテスは船の喩えをアルキピアデスがアテナイの国政に参加したいという気持ちを示したところで出している。そこでは、船長の仕事が船員や乗客の安全を図るように、国政の仕事は国民の安全を守ることであるとされる。国民の安全は国家の成員の間に調和が生じることで確保される。さらに国家同士の安全も調和をもとに確保される。船長の役割は単に他の船員や乗客に対して自分の卓越性を誇示することではなく、船を安全に航海させることである。この喩えから国政に携わる政治家は自分の政治的能力を誇示するために政治的活動に参加するべきでなく、国政を正しく運営することが役割であるとされる。

コーラスリーダーの喩えもまた同様に用いられる。コーラスリーダーの知識はちょうどオーケストラの指揮者のように、ハーモニーをもたらすために有用である(125e)。それはコーラスリーダー自身の卓越性を提示する自己顕示のためではなく、人々の能力を正しく引き出し、纏めていくために有用である。ここからソクラテスは国政を正しく運営することについて吟味し、国政における正不正とはそれぞれが正しく自分の持ち分を弁

え、調和することを定めることであるという考え方を提示する。

ソクラテスはこの二つの見方を提示することで、アルキビアデスが考えている政治的野心を真に達成するためには今のままでは不十分であるという自覚を求めていく。重要なことは支配することよりも、リーダーとして調整していくことである。そしてこの中で自分自身に気を付け、弁え、身を処していくことの大事さを織り込んでいく。

アルキビアデスは政治的指導者として自分に何が必要かも実は不完全にしか分かっていないと言う事実に直面して、自分が不完全であることに戸惑う (127e)。アルキビアデスがソクラテスの論駁を受けて、正不正について考え直す必要に目覚め、十分知っていない自分自身に気付くという変化が対話の中で起きている。ソクラテスの辛辣な指摘は次のように結ばれる。「アルキビアデスは正不正について何も知らなかったのに知っていると思い、アテナイの国政に出て、自分の一つも知らないことについて提言をしようとしている」(113b)。

この状況でアルキビアデスは追い込まれた自分を感じる。正不正の問題を巡って始まった議論が自分の無知の確認へと繋がっていく。この困惑の中でソクラテスとの問答から自分自身に気を付けていくことが重要であるという示唆を受ける。そして今度は逆にソクラテスはアルキビアデスに自分が質問者の立場に立ち、吟味を続けていくことを提案する (113e-114b)。そして国政で提言するということはどういうことか、アルキビアデスが求めていた政治家としての役割は何を目的としているのか、をこの過程で示していく⁸⁾。

以上、アルキビアデス篇の最初の三分の一に当たる、ここまでのところで、ソクラテスの対話は主としてアルキビアデスのドクサ (δόξα, 通俗的理解) の吟味に限られている。もしソクラテスの活動を対話相手をアポリア (ἀπορία, 袋小路) に導くという論駁、エレンコスの過程としてのみ捉えるならば、ソクラテスは対話相手の主張を否定するところで終える

ことになる。しかし、ソクラテスの意図を単にアルキビアデスをアポリアに導くだけでなく、教育者としての意図のもとに見るならば、アルキビアデスが行き詰まった時にこそ、ソクラテスの産婆術的教育方法が前面に出てくる。反駁は目的ではなく、助走段階として位置づけられる。実はアポリアに陥り、当惑している状態は新たな探求のために心身が解脱した状態になり、透明な心で吟味に入る状態になっていると言ってよいのである。

それはアルキビアデスがアポリアに陥った時、なお過去の自分に固執して議論の抜け穴を探そうとするところにも示される。民衆がもしソクラテスの求めるような訓練を受けていないで、正不正に無知のまま、ドクサに従い行動するならば、今のままで十分アルキビアデス自身の立場が通じるはずであると(119b-c)。言い換えると、衆愚政治の肯定である。これに対しソクラテスはデルフォイの神殿の言葉、汝自らを知れ(*γνώθι σαυτόν*)という格言をあげてアルキビアデスに自分自身に気を付けることを求める(124a-b)。ここでソクラテスは政治的成功や経済的追求ではなく、自分自身を吟味する必要を示す。このように全てをまず否定しきる過程を経た時点で、今までの見解を全て放下し、心身解脱の状態で探求のための助産が始まる。

この自分自身を吟味するというソクラテスの指摘を受け、アルキビアデスはさらに自分自身に気を付けることとは自分の何に気を付けることなのかを聞き出そうとする。ここからソクラテスはそれが自分に付随しているものではなくて自分自身を自分自身たらしめているものに気を付けることが重要であるとする(128a)。

アルキビアデスへの答えの中で産婆術というソクラテスの教育方法が前提とする「吟味なき生活は生きるに値しない(*ὁ δὲ ἀνεξέταστος βίος οὐ βιωτὸς ἀνθρώπῳ*)」(38a)というソクラテスの弁明篇の立場が示されてくる。それは自己に向かって吟味していく求心的な探求の働きを自分の内に見出していく過程として示される。

3. 産婆術の過程と問題

以上、ソクラテスがアルキビアデス 1 篇で、自分自身を吟味するという内面に向かう働きを示していたことについて述べた。本説では、自分自身を吟味するという求心的な働きを明示する中で、産婆術の方法に対して指摘されている内在的問題を見る。

この求心的な働きはソクラテスがアルキビアデスに問うところから始まる。「正しい仕方て氣を付ける (ὁρθῶς ἐπιμελεῖσθαι)」(128b) とはどんなことであるか。ここでソクラテスは靴の例を挙げて言う。善い靴は足のためであり、善い足は体全体のためである。例えば、善い靴は快適に歩行できるためであり、善い足は体全体の機能を高めるためになる。しかし対象物が靴や足などである場合、それに氣を付けることはたやすい。しかし、氣を付ける対象と氣を付けようとする自分が同一である場合、自己撞着の問題が生じる。この場合に「どういふ仕方てちょうどその『自分自身』というものを見出す (τρόπον εὐρεθεῖν αὐτὸ τοῦ ἑαυτοῦ)」(129b)⁹⁾ ことができるかが問われる。ここでアルキビアデスは自己理解に向かうことになる。

もとより、自分自身に氣を付けるという場合に靴職人の例と人間が自分自身を問題とするという場合に比較関係が成立するかどうかは詳しく考えないといけない。しかしこの比較は身体と心¹⁰⁾との区別をしていくことに繋がる。自分自身を構成するものは目に見える身体や、その付属物である靴、服、ひいては財産、社会的地位が目に入る。しかしこれに対して、見ることのできない心も自分自身である。人間は自分の手足でさえ、それが悪いと知れば失うことを受け入れる。そうなると、身体は、考える役割をする自分自身の心とは同一であるとは言えない。その価値をより上位の価値から位置づけられるものであり、価値を与えるものではない。ここで探し求められているのは価値を与える自分自身だからである。だから身体は主にはなれない。身体が支配者となつてしまつた時、私たちは身体的欲求

に引きずられることになる。それ故、自分自身として本来のものは自分の心ということになる (130c)。

この説明から引き続いてソクラテスは自分はアルキビアデス自身の心に向かって問いかけていると言う。ここで先のデルフォイの神託、「汝自身を知れ」という要請は自分自身の心の有り様を知れという命令として読みかえるべきことが示される「自分自身を知れという課題を出している人は心を知れと命じているわけなのだ (*Ψυχὴν ἄρα ἡμᾶς κελεύει γνωρίσαι ὁ ἐπιτάττων γινῶναι ἑαυτόν*)」(130e)。自分自身を吟味することを怠ってはむしろ自分の求めているものから離れていくことになる¹¹⁾。

この指摘を受けてアルキビアデスはさらに自分自身をどのように知るかと問い続ける。ソクラテスはここで「そもそも何に目を向けたら…われわれ自身を見ることができるか (*ἐννοῶμεν δὴ, εἰς τί βλέποντες …ἡμᾶς αὐτούς*)」(132d)と問い直す。そこでソクラテスは目の喩えを使い、いかに自己理解に達することができるかを説明する。人が自分の目を見るためには鏡をのぞき込むことで見ることができるよう、心も鏡をのぞき込むことで自分自身を映し出すことができる。心にとっての鏡とは卓越した徳を備えた知恵を有する他の心である (133b)。それは曇りもなく、卓越していればいるほど、より良く自分の魂を映し出すことができる。「自分を知るということは自分の心の有り様を知ることと思慮の健全さを保ち、克己節制すること (*τὸ δὲ γινώσκειν αὐτόν ὡμολογοῦμεν σωφροσύνην εἶναι*)」(133c)であり、それは人間にとり最も神聖な働きであるとソクラテスは言う。

ここでアルキビアデス 1 篇を教育的視点から見た場合に生じてくる論法の循環があることが指摘されている¹²⁾。それは自己言及の問題に共通する循環である。自分を知るために、自分を何かに映さなくてはならないという立場では、自分を投射する先、産婆術の場合、産婆となる相手の存在が前提となる。自分の心の優れた部分である卓越性を他者の心に映して見

ることで、自分を高め、知恵を得る。ソクラテスの立場からするとそれが可能なためには鏡となる他者の心の中に自分の優れたところを映す鏡があることになる。ここから循環が生じる。「優れた部分を映し出してくれる他者をどのように見出すか」という循環である。なぜなら、他者の心に自分を映して有徳さと知恵を得るためには、鏡となる相手の心が映し出すべき優れたところを持っていないとてはならない。そして鏡となる相手の心が有徳で知恵を持っているかどうか分からなくてはならない。そのためには既に前もって自分自身が有徳さと知恵を持っていないとてはならない。なぜなら、相手が持っているかどうか判断しなくてはならないからである。知恵や徳のない人に投射しても、自分の心の優れた部分は反射されないからである。しかし、自分自身が知恵や徳を持っているならば、他者に映し出し学ぶ必要はないし、自分自身が知恵や徳を持っていないならば、知恵や徳を持っている他者を見つけ学ぶことができない。

これはメノン篇のパラドックスと同様である。メノン篇ではソクラテスは徳が何であるか知らなければ、それについて学ぶことができない、しかし、知っていれば、また学ぶ必要はないという逆説を主張した¹³⁾。自己言及はその自己言及の枠内でその正当性を立証できないことは、クレタ人のパラドックスに示されている通りである。

このパラドックスについてソクラテスは自己の無知についての自覚を踏まえた上で、自分の中に産婆術に対応する内在的な働き、自ら納得のいく生き方を求める働き、のあることを自覚することにより、自分に欠けているものを他者の中に見出すことができるとする。ソクラテスはアルキビアデスに言う。「君は何より納得を求めているのではないか。…それなら君は自分でこれはこうだということになった時、最大限の納得ができたことになるのではないか(οὐχ ὅτι μάλιστα βούλει πεισθῆναι; …οὐκοῦν εἰ λέγοις ὅτι ταῦθ' οὕτως ἔχει, μάλιστ' ἂν εἴης πεπεισμένος;)] (114e).

他者の心の中に写し出した部分が学ぶに値するものかどうかは、産婆術

に刺激され、その問いかけに答え、自分自身が納得していくという心の働きが決定していく。自分が求めているものが他者との交わりの中で納得でき促進されていくかどうか、映し出された自分が正しいかどうか、自分がより善く生きていく上で真に必要なだとして納得できるかどうか、の吟味で決定される。ソクラテスが吟味の中に示した通り、ただ単に技術的な知識を有するだけでは知恵や徳ある人とは呼ばれない。またある政治的な名声を誇るだけでは知恵や徳ある人とは呼ばれない。ある人が鏡として知恵や徳ある人かどうかは、その人が自分に取り、まず第一に自己理解を深めていくために有意義で、自分自身を自覚していくために触媒となり、また善い方向に向けて促進していくものを持っている人として納得できるかどうかである。

ここで第二の指摘が生じてくる。それはソクラテスの言う産婆術的方法がより正しい方向に向かうかどうかという保証である。私たちが自己理解を高めていくつもりでも、先のパラドックスにあるように、自分を反射している鏡となる人物が自分を高めることに寄与する人物であるかどうかは自己言及である以上、判定基準として十分ではないという問題である。もし自分も相手も知恵と徳とで優っていないとしたら、相手に自分を投射してみたところで、自己を高めることはできない。したとしても単にそう感じさせることができるだけである。対話を向上に繋げることが産婆術であるという視点で見ると、対話の結果、向上を妨げてしまうようなことは教育の妨げになる。

その向上のための保証として、ソクラテスは映し出す鏡の役割を、社会にまで求めたと考えられる。ソクラテスはアルキビアデスに言う。自己を高める自分の最善の部分と相手の最善の部分とを照らし合わせることで、すなわち心の本来の機能、最も神聖な神に似ている働き、自分自身を吟味し、自分自身を最大限に向上させようとするという働きを司る部分を照らし合わせることで自己吟味は可能になると(133b-c)。個人のレベルでは、

一人ひとりが照らし合わせることで自分の存在を意義づける。鏡となることで相手が自分を高めていくという結果が生じるならば、その分、鏡となった人間の意義も高まる。ソクラテスにとり、この照らし合わせが社会の中で積み重なることで、社会全体が自己吟味を始めることを期待した。その自己吟味の積み重ねが国政の向上に繋がる。アテナイの街角で人々を相手に対話したソクラテスの活動は社会全体に対して行う自己吟味への訴えである。

それだけにこの照らし合わせの基となる自己知識なしでは、アルキビアデスのように国政に携わろうとするものにとって最善の働きをできないことになる。「自分で徳を身に付けなくてはならない。…ならば自分自身のためにも、国家のためにも留意しなければならないのは正義と節制であり、…そこへ目を向けることで自分自身と自分自身の持っている善いところをよく知ることになる (*αὐτῷ ἄρα σοὶ πρώτον κτητέον ἀρετὴν…οὐκ ἄρα ἐξουσίαν σοὶ παρασκευαστέον αὐτῷ ποιεῖν ὃ τι ἂν βούλη, οὐδὲ τῇ πόλει, ἀλλὰ δικαιοσύνην καὶ σωφροσύνην…ἀλλὰ μὴν ἐνταῦθά γε βλέποντες ὑμᾶς τε αὐτούς καὶ τὰ ὑμέτερα ἀγαθὰ κατόψεσθε καὶ γνώσεσθε*)」(134c-d)。

最終的には自分自身に気を付け、向上させるということが社会全体に対する貢献に繋がることをソクラテスはアルキビアデスに提示する。政治的な技術が何より市民の幸福を増大させることにあると考えるならば、自分自身を知ることが自分の卓越性を高め、統治するものは被統治者を導いていくことができるのである。ここでソクラテスは人間の内面を配慮することが社会全体への配慮と関係していることを示している¹⁴⁾。自分を正しく律することができない人間がどうして社会のトップとして他者を律することができるか、これがソクラテスがアルキビアデスに突きつけた問題なのである。

4. 産婆術の実践——自分自身に誠実に向き合う姿勢を保つ

自分自身の心を知ることが他の人々を導いていくためにはまず必要であるとソクラテスはアルキビアデスに示す。これは、自分自身の主人であり、自分自身を御することができて初めて、他者に対しても従属することなく、御されることもなく、あることができるという真の自由をもたらす。

では自分自身の心に気を付け、自分自身の主人になるということは何のようにすればよいのか。アルキビアデスの問いかけ「そのためにはどんな用意がいるのでしょうか」(132a)に答えソクラテスは言う。「まず修練すること、そして学ぶのだ(γύμνασαι πρῶτον…καὶ μάθε)」(132b)。これは第一に繰り返して行う修練(γυμνασία)、続いて第二に、より広い文脈の中で学ぶこと(μάθησις)との二つにより為される。

修練 γυμνασία の動詞形 γυμνάζω は一般に訓練するという意味があるが、比喩的に試練を与えるという意味にも使われる。学ぶこと μάθησις は一般に知ることを意味するが、同時に知ろうとする意欲、学ぶ心構えも意味する。

ここで言う修練は反復を含む。それは反復学習による技術の習得にも比べることができる。例として外国語の習得、楽器の演奏方法の習熟、体育の基本練習などを思い浮かべることができるが、ソクラテスの考えるのは対話の修練である。ここで言う対話とはもちろん日常のおしゃべりのことではない。ソクラテスの対話篇でアルキビアデスとの間に展開されているような真理を求めて、火花の散るような真剣勝負としての対話を意味している。

この対話は、短い命題の確認という形をとって行われ、演説や一方的説明のような長広舌をふるうことではない。ソクラテスはアルキビアデス篇の最初のところで対話の目的を「君の志しているものの然るべき由縁をはっきりさせていくことは…君の意中にあるもの(οἷός τ' ἄν εἴην ὅτι τα

ὄτα οὕτως ἔχει … ἃ φημί σε διανοεῖσθαι)」（106b）を示していくこととして確認している。

対話は訊問とは異なることには気を付けないといけない。訊問とは訴訟などに対し、強制的に返答を求めることである。対話はこのような強制的な関係にはない。ソクラテスの対話の特徴は対話に加わる参加者が対話に加わること自体に同意している点である。教え込みではなく、対話ではまず自分の言葉として自分から進んで整理し主張していくことが求められる。自らの思考や行動を、自らの能動的な管轄下におくというメタ認知を踏まえ、自分で納得して自説としていくことなのである。これは自分自身で自分の考えや行いを吟味し、自分自身が納得するという点である。ソクラテスの産婆術は対話の過程を通じて、自分自身を試練に曝し、自らの内に自分自身を吟味する中央制御のための中枢センターを作るようなものである。それは個々の判断や行為が吟味され、正当性を確認され、一貫した統一的な構成のもとに位置づけられていくという統轄本部のような働きをする。これは自分自身で確立した思考体系を前提とする。もちろんその時、その吟味へのきっかけとして他者の存在が有意義なことはあろう。しかし本質的にこの過程は自己吟味の過程である。自分自身の言葉として表明した時初めて、ソクラテスの対話は成り立つのである。ソクラテスから解答と指示を求めるアルキビアデスに対して、先の引用のように、ソクラテスは言う。「君は何より納得を求めているのではないか。…それなら君は自分でこれはこうだというようになった時、最大限の納得ができたことになるのではないか」（114e）。ソクラテスのこの主張は自己吟味は自分の主張の一貫性を確認していくプロセスであることを示している。

この問いからソクラテスはアルキビアデスに自分が誰か他の人に師事することで賢くなれると思っていたことの不十分さに気付かせる。ここから自己吟味への道が始まるのであり、対話による自己修練の過程へと続くのである¹⁵⁾。

この自己吟味という点から自由の位置づけも出てくる。自由とは何かをすることに制約がないという意味での自由ではなく(134c)、実践を通じて自分を変えていくという変化の可能性を意味している。それは自分に居心地のよい同じところ(ドクサ)に安住することを許さない、自己変革を求める圧力としての自由なのである。そこでは不断の自己吟味が前提とされている。この視点からソクラテスはアルキビアデスに真のアテナイ市民としての自覚を求めることになる。アルキビアデスが政治に携わる以上、自己吟味を通じて情け容赦のない赤裸々な自己に直面する修行を踏まえていかななくてはならないことを示す。それは青年であるアルキビアデスにとり、それまでの美辞麗句に飾られた政治的栄誉のイメージを根底から覆すものとなる。むしろ自分自身を荒野に向かわしめ、自分の生身の能力を試練に曝すようなものである。

ソクラテスの言う自分自身を知るとは、自分自身を司り、自己統制を行うという意味である。ここには、自分自身を客観的に見て自己吟味していくという批判的な過程と、同時にその吟味に基づいて実際の生活の中に徳のある行為を実践していくという両側面が含まれる。ソクラテスにおいては実践と理論的吟味とは車の両輪なのである。

ここには練習、学習、実践、成長という繰り返しのプロセスが生じる。それは修練の過程における自己錬磨であり、いつの年齢になっても停滞は硬化であると自覚することである。過去の自分に固執したり、過去の自分を美化したり卑下したりすることは自分自身にとっても、また対話の可能性を保持するためにも有害である。自分に傲らず、諂わず、対話の中で自己吟味をしていく。心の柔軟性が対話には必要であり、それを失うことは自己生成の終焉である¹⁶⁾。

対話を通じた自己吟味の過程で、今までの自分の意見が変わっていく例もある。ここで意見が変わる原因については二つ考えられる。一つは自分自身で考えたものではなく、他の情報源からの借り物でしかなかったも

の、もう一つは自分自身で考えたものでも、未整理で一貫していない信念に留まっていたもの、この二つである。この二つのため自分の所有していた意見が不十分なままで未吟味の状態に留まる。この状態から脱するため、ソクラテスは反駁を出発点とする。対話を実りあるものにするためにはまず、対話者が自分の考え方そのものを自分のものとしていなくてはならない。もし借り物でしかないとしたら、反駁されてもまた別の借り物を持ってくることになるだけであるからである。対話が進行していく中で対話者は自分の意見を確立していかななくてはならない。

それ故、対話とは人生の長きにわたり、自分自身の力で考え、自分自身を客観化して吟味し、自分自身の本源を訪ねていくという活動なのである。ソクラテスは弁明篇で自分のしてきたことは「生き方の吟味 (*ἐλεγχος τοῦ βίου*)」(39c) であるとした。これは自分のよって立つ信念そのものの吟味である。どこまで性根を据えて自分に対峙しうるかという矜持への問いなのである。そうである以上、対話は対話者同士の探求であると同時に、自己自身に対する対決でもある。自分を裏切ることもし、自分を欺くこともできる。自分から逃げることもできる。しかし、裏切ったとしても、欺いたとしても、逃げたとしても、自分はいつも、前にいる。ソクラテスがアルキビアデスに示したことは自分に向き合うことである。教育が何かを与えることや何かを獲得させることだけでなく、自分の心を知ることであるとするならば、ソクラテスの産婆術とは自分に誠実に向き合うことを奨める教育活動である。

ソクラテスの弁明篇の中で、自らをアテナイの虻とソクラテスは位置づけた。その役割は次の三つを含む。1 世俗的な利益、金銭、快樂、名誉などよりも徳の追求が何より大事であることを示す。2 自分が何かを吟味する。3 この吟味を通じて何が欠けているかを明示する (29d-30b)。アルキビアデスとの対話でもソクラテスはこの虻の役割を演じる。アルキビアデスは探求と吟味の対話の過程の中で将来自分の経歴に必要なものを

見出していき、今の自分の用意では不足していたことに気付いていく。

自己を知るという営みは必然的に自己を見つめることを含む。人間の常として自惚れ、自己満足、自己正当化など、気が付かない内に自分の中に潜む自己がある。吟味なき生はこれらに気がつかないままに、あるいは分かっているながら見ぬ振りをして生きることである。必然的に自分を吟味することは安住していた世界から自らを厳しい世界に連れ出すことになる。プラトンの洞窟の比喩が最も端的に示すように、真実に近づいていくことは目が眩むような苦痛を伴う。対話は実は苦痛を伴う活動である。そしてソクラテスはこれを自他共に対して求めた。ここにソクラテスの産婆術とは自分に誠実に向き合うことを求める教育活動であることが示されてくる。

ま と め

言論が人間に許された思索のための道具であるならば、この道具を用いた対話を通じて自分自身の魂の世話をする他はない。アルキビアデス 1 篇でソクラテスがアルキビアデスに示していることは、このためのさまざまガイドラインである。

ソクラテスの対話は共に対話した相手に対してのみ限られるのではない。ソクラテスはアテナイ社会の中で多くの人と対話が続ける中で、自分の対話技術を先鋭化していく。その中でソクラテスは自分自身に対する吟味も怠らない。それはソクラテス自身についての知識も改めていく。これが自分の心の世話をするという言葉として示されてくる。それは自分の強さ、弱さ、可能性、限界、を自分で暴露していくことである。それにより自分を客観化し、自分に囚われることが少なくなっていく。言い換えればより大きな自由を手に入れることになるのである。

ここにこそパイディア (*παιδεία*, 教育) の出発点がある。ソクラテスのパイディアとは克己を通じた社会的人間生活全体についての配慮であ

る。それと同時に産婆術という教育活動は社会全体という自己を映す鏡の純化をしていくことでもある。

その時、自分を他者に照らし合わすという対話の過程が意味を持つ。自己理解はソクラテスにとり、共同体の中で初めて可能となる。対話とは、自分自身の生き方を吟味し、その客観的妥当性を確認していく、その過程で自分自身の結論に納得していく、そして自分の行動を律し、展開していく、ことなのである。これは自分自身を対象化し、自分自身と対話していくという律動的過程であり、単なる孤立した内省とも、静的な観照的生活とも異なる¹⁷⁾。

註

- 1) 『アルキピアデス 1』に対して『アルキピアデス 2』という作品があるが、プラトンの真作として疑わしいとする立場がある。川田殖訳『プラトン全集 6』(岩波書店, 1975), 228 頁
- 2) 村井実『ソクラテスの思想と教育』(玉川大学出版部, 1972), 146 頁。
- 3) プラストスは無知の知について「ソクラテスはエレンコス論破による知識の所有を表明しながら、確実な知識の所有を否定している」という。Vlastos, G., *Socratic Studies, 2. Socrates' disavowal of knowledge* (Cambridge U.P. 1994), pp. 39-66. しかし、岩田は「確実な知識とはどういうものか…についてはまったくプラストスは何もいっていない」と批判する。岩田靖夫, 『ソクラテス』(頸草書房, 1995), 109 頁。
- 4) リーブは「専門的知識」と「非専門的知識」とをわけ、ソクラテスの無知の知とは非専門的知識は持つが、専門的知識は持っていなかったという主張であると解釈する。Reeve, C. D. C., *Socrates in the Apology* 'chapter 1 The False Socrates' (Hackett Publishing, 1989), pp. 39-41. しかし、岩田は「リーブでは技術と徳との本質的相違が見逃されている」と批判する。前掲書, 112 頁。
- 5) ブリックハウス・スミスはソクラテスのいう知識とは正しく行為する能力であるとする。Brickhaus & Smith, *Plato's Socrates* (Oxford, U.P., 1994), pp. 30-44. しかし、岩田は「これでは倫理的真理の普遍的本質に到達しておらず」にいと批判する。前掲書, 115 頁。

- 6) D. Sedley, *The Midwifery of Platonism* (Oxford U.P., 2004), p. 25.
- 7) アルキビアデスの生涯についてはプルタルコス『アルキビアデス伝』、トキュディディアス『歴史』第五巻から第八巻に記述が見られる。
- 8) ソクラテスはさらに正不正と利益の関係についても同時に考察している。この過程から生産的な対話が始まる。利益をはかることを公正の主たる内容とすることは、結果アポリアに陥ることとなるのだが、しかしそのアポリアはさらなる展開、知らないことを知っているという知識のあり方の理解へ繋がっていく。知らないことにも関わらず知っているという知識の自惚れ、知っていないにも関わらず知っていると思こんでいる知識の傲慢さ、アルキビアデス自身の迷いは自分自身の無知の自覚に繋がる。
- 9) このような *ταύτό* を *τὸ 'αὐτό'* と読む読み方は田中美知太郎の訳に従った。田中美知太郎訳『プラトン全集 6』(岩波書店, 1975), 83 頁。
- 10) ここで使われる心 (*ψυχή*) の意味については村井前掲書 104 頁が詳しい。
- 11) この指摘をすることでソクラテスはアルキビアデスの悲劇的とも言える将来への不安を指摘する。「一番恐ろしいことは民衆の恋人となって腐敗してしまい、今より醜くなってしまう (132a)」可能性を指摘して、事実、アテナイの「善い生まれの人でそうなったものも沢山いる」ことを述べる。そしてそうならないためにも、ソクラテスは「学ばない先にすべきではないものがあるからまずそれを学ぶこと、それは解毒剤を用意していく」(132b) というアドバイスをする。
- 12) D. Sedley, *ibid.*, p. 25
- 13) 東敏徳「アリストテレスの教師観」(田中克佳編著『教育を問う教育学』(慶応大学出版会, 2006) 所収)
- 14) これはプラトンが社会の構造を人間の内面の三分割と対比していたことを思い起こさせる。ここに自分を吟味するという過程と政治的生活の中で社会のあり方を吟味するという過程の同質性が提示されてくる。自分を正しく律すること、これが社会の正義を考えることの過程と同定視されてくる。これはプラトンが『国家』の中で人の心の機能の三分割説と社会の機能の三分割と対比した説に共鳴している。
- 15) このような過程は必然的に対話者の中に隠されている性格的欠点までも暴露していく。無知を知らせることがソクラテスの対話篇の課題であるとしたら、その無知を知らせるための論理的道具としてソクラテスが用いた論破に向けた風刺、からかい、揶揄は位置づけられる。
- 16) プラトンはこのような対話というドラマ仕立てで話を進行する筋立てをとった。対話形式という表現形態を採用することで、様々で多様な局面と登場人

物を用いることができる。そうすることで哲学にビビッドな特徴を与える。対話は特定の人間による特定の状況下での出来事である。この方式を採用することで、聴衆は自らの体験と対応して考えることを余儀なくされる。ここにソクラテス的方法の特徴も提示されてくる。それは同時に対話の参加者だけでなく読者にも真摯な態度も要請する。アルキピアデス 1 篇でこの真摯な態度に対する要求は頂点に達する。このようにして実はプラトンはアテナイの人々にソクラテスという人物を通じてメッセージを広めていったのである。

- 17) しかし同時にこれは当時の政治的権力に対する挑戦となる。ここでのソクラテスの解放はただ単なる拘束からの解放ではない。権力の頸木から解放されること、権威の圧迫から解き放たれること、ソクラテスはこれを考えていたのではない。むしろ逆で自分自身が自分を律すること、これこそ解放と考えていたのである。17 年後、『饗宴』でアルキピアデスが登場するが、ソクラテスが心配した通り、権力の腐敗、墮落から距離を置くことは簡単なことではなかった。それは『アルキピアデス 1』の最後の締めくくりの言葉の危惧として示されていた。「この国家社会の影響力の大きさに負けはしまいかと心配なのだ (135e)」。この危惧からソクラテスはアルキピアデスに自己吟味を勧めたが、この過程は不断の努力を必要とするものであり、その困難さはソクラテス自身が刑死を受け入れるという最後に最もよく示されている。ソクラテス自身が実はこの自己吟味を続ける生き方の見本であり、同時にその自己吟味がどれほど困難な過程であるかの証明なのである。

付 記

プラトンの著作の引用は岩波書店刊『プラトン全集』を参考に *Loeb Classical Library* によった。また引用、参照の末尾の () 内の数字はステファヌス版全集 (H. Stephanus, *Platonis opera quae extant omnia*, 1578) の頁数と各頁の段落づけに対応している。